

## 西平山の旧燃糸工場

西平山く大和田にかけての<sup>せいでん</sup>一帯には、かつて複数の燃糸工場がありました。もとは浅川からの用水で水車精穀せいきくを行っていたが、大正時代になると、水車を利用した燃糸が行われるようになった

燃糸工場であった建物が残る高橋糸工場は、昭和九年（一九三四）に創業し、昭和四十年初期まで燃糸業を営んでいた。はじめ自家も養蚕を行い、近隣の養蚕農家から繭を買入れて八王子の問屋に販売していたが、その後、八王子の織物屋と縁戚になったことを契機に、その親類が燃糸工場を始めると、自家も燃糸工場を始めた。電気動力を用いた燃糸を行い、家族中心の労働に少人数の工員を雇う家内工業的な経営であった。燃糸とは、生糸に撚りをかけて織物に適した糸にする作業で、撚りの強弱や糸の本数を変えることで、織物に適した強さや風合い、肌触り等を引き出します。

旧燃糸工場の天井は、部材が三角形に組まれたトラス構造の骨組みを持つ。柱のない空間には、イタリー式燃糸機六台をはじめ燃糸に必要な機械が並んでいた。天井には開口の跡があり、東南西側を連装窓れんそうまどにして、糸をつなぐ等、細かい作業がしやすいよう明るくされていた。

西平山・大和田で燃糸業盛んになった背景には「地の利」がある。浅川を隔てて八王子に接し、八王子へ物資を運ぶ「八王子馬力街道」が集落を貫いていた。買い物やお祭りも八王子に行き出荷燃糸の付箋に「八王子市外七生村平山」とあるように、当地が八王子の経済圏にあったことを物語っている。

また燃糸は湿っていた方が切れにくい。浅川べりにある西平山西側一帯は、燃糸をするのに適度な湿度があった。

本件は、区画整理で変わっていく西平山地区にあって燃糸工場時代の痕跡をとどめた貴重な事例である。

